

# 多言語対応・ICT化推進フォーラム

## 基調講演「日本における英語表記・表現」

講演者：日本文学研究者 国文学研究資料館長 ロバート キャンベル 氏

幕末からの古い日本の資料を見ていると、文字からだけではなく、絵などの図案の中の形状から意味を読み取ることができるものがある。これは、日本文化の特徴であり日本人の職能と言える。ここ数十年は、アメリカと日本の言語学者の間でも、「言語景観」という概念が提唱されており、耳から入る言語だけでなく、目から入る情報がどのように社会に受け入れられているか等、比較研究が行われている。

日本語を学習していない人が日本語の言語景観を見ると、私達がソウルやバンコクに行った時のように、文字に見えるのに意味がわからない文字がたくさんあって、読もうとしても読めずに疲れてしまうと思われる。日本のマンガは海外でも翻訳出版されているが、擬音語や擬態語がさまざまな形状でコマの中に描かれている。これも日本人が見れば自然に音が想起されると思うが、慣れない者からするとまず絵なのか文字なのかすら分からない。日本の街中の景観も、日本語話者以外にはそのように見ているのではないかと思う。



よって、日本で多言語表記をする際には、単に翻訳して掲示すればいいのではなく、日本語とそれ以外の言語のレイアウトも考える必要がある。

逆に言えば、文字を単なる情報伝達としてだけでなく、景観の中で、文化としての特徴を色々と活かして使っていくことができるのではないか。海外で出版される日本のマンガの文字表現は、昔はすべて翻訳されていたが、表現しきれないこともあり、最近では吹き出し内のセリフ以外は日本語のままとなっている。若者達はこれに慣れているので、日本語の擬音語・擬態語には親しみがある。日本語の文字や擬音語・擬態語はまずデザインやファッションとして捉えられ、そのあと意味が伝わっていった。

東京の昔の地図や写真を見ても、敗戦後にGHQが来た際に、全て英語表記の地図が作られたり、進駐軍やその家族が暮らす一帯の看板表記が全て英語になっていたりする。日本語の地名をどこまで英訳するか、ローマ字であれば長音表現などをどう統一するかは、この時徹底的に検討された。当時は今と違ってお互いに言葉が通じず、翻訳ツールなども当然ないので、いかに安全に行きたい場所に行けるかが主眼となっている。逆に再興を目指す日本人からしてみれば、英語だらけだった東京の街中に、いかに日本語を取り戻すかが重要だった。

それから戦後70年、状況は大きく変わり、日本独自の景観と表現が行き渡った中で、今度はインバウンドで日本にやってくる人達のため、どのように公共空間を多言語化していくかが大きなテーマである。もちろん分かりやすいこと、伝わることも大切だが、例えばこのひたちなか海浜鉄道の駅名看板。ブランディング再構築の一環として、駅ごとにイラストを入れ込んだデザインの看板を設置した。かなりギリギリまで文字を崩しているので、日本人でも「これは何の文字だろう」と不思議に感じるかもしれない。また、電車の車体に地元の子供達がイラストやメッセージを書いたり、単に情報だけでなくキャラクターやその地域の人々の温度感などが伝わる、体験できる力がある。



日本は地名が多く、また普段の暮らしの中にも文字が多い。地図記号の見直しやローマ字地名表記の統一などは、現在も国の主導で進められているが、この那珂湊の例のように、文字自体がデザインとなり、おもてなし体験、空間演出になるようなことも、これから検討していくとよいのではないだろうか。

(平成29年度作成)

「多言語対応・ICT化推進フォーラム」

参考資料配布：<http://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/council/#m07>